
アグレッシブ

knocker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アグレッシブ

【Nコード】

N0597I

【作者名】

knocker

【あらすじ】

サボり癖のあるキャプテンとエース、高飛車な二年生、事態収拾に追われる部長。名門と呼ばれる女子テニス部の緩くてお決まりのお話。

01.

それは多分、高校生活最後にして最高に波乱に満ちた、夏の始まり。

あ、またサボってる。呟きほどの小さな声が肩の後ろからやってきて、相手が誰だか見当のついていた私は軽く白眼を向いて見せた。声の主はくぐもった笑いを隠そうともしないまま、「おはよう咲野」取り繕った笑顔とは裏腹に、私の右腕を掴んだ手はみしりと音を立てそうなくらい強い。

「おはようございます篠原さんいい朝ですね」

「今日は彩乃さえサボってなかったのよ？」

「でもトータルでいけば彩乃の方が断然多いはずですけど、ど……」

「ねえ咲野さん？」

まずい。口がそのまま裂けてしまいそうなくらいに吊りあがっている。こんな時のマネージャーは何よりも怖い。私よりも四、五センチ低い位置の双眼に愛想笑いしてみても、青筋がひくひく唸るだけだ。私は黙って諦めた。

あのさあ、と少しだけ真顔になった彼女は、幾度か口の開閉を繰り返してからひとつ唾を呑んだ。

「咲野といい彩乃といい……もう少し自覚したほうがよくない？」

あんたたちはキャプテンとエースでしょう？」

ツインテールがぶらぶら揺れている。それが風でも校門の空気をかき混ぜる生徒たちのせいでもなく、篠原本人の怒気だということに今更気がついた。

「それに……こんなことあたしが言えることじゃないけど、咲野たちは強いんだし……全国でも壱羽高校テニス部は名門って言われて

るし、だから」

徐々に重たく垂れ下る頭は、もうつむじしか見えていない。

こういうときに、混沌としている相手に気の利いた言葉をかけてみたい。その一言でうなだれる頭が跳ね起きる、そんな何かを。

結局自力で回復した篠原は、すぐに登校する生徒に混じって姿を消してしまった。白く塗られた校舎に掲げられた大きな時計が音を立てた。八時だった。

「あ、それ私も言われたわ。溜まってんのかな」「な……何が」「ストレス」

並んで部室のベンチに座り、ソックスを履き替える。「ちよつとサイズでかくなつたかも」と笑って彩乃が白のソックスを引き伸ばす真似をした。もちろん伸びやしないけど。

暗い室内には今はボールもラケットも見当たらない。部屋の使用者たちは二人を除いて、既にコートで練習を始めている。

「何て言おっかな。委員会が遅れたとでも言っところかなあ」

「私は本当のことだから言い訳を考える必要は無し……と」

「静葉ってさ」かつん、と爪を鳴らす音がした。彩乃の癖だ。短髪の幼馴染は、昔からよく会話の途中で目を伏せて爪をいじる。

「なんでもこなすよね……いいなあ」

かつん、かつん。長い間、幾度もいじられている割に彩乃の左手の爪は綺麗だ。

「彩乃に言われたくないよ」

「ふうん……ありがとう」

さて行きますか、と満足げな顔の彩乃が立ち上がる。「立たせて」

「やだ」「立たせろ」軽い押し問答の後によく彼女は私の手を引いてくれて、私たちは二人で部室を後にした。

テニスコートは部室から少しだけ離れたところにある。校舎の中庭を突っ切り、校庭の入口へ来たところで更に右へ。その距離をダッシュで往復するだけでも十分な準備運動になると思う。

幽霊部員ばかりの園芸部が育て飽きたいくつものプランターの転がる中庭を越え、ひたすらノックを受けている野球部の隣を通り過ぎると、聞きなれた大勢のテニス部員の掛け声が木々の間をすり抜

けてやってきた。

「やってるやってる」にしし、と二人で顔を見合わせ、なんでもない顔をしてフェンスの扉から滑り込んだ。

——途端、頭上から叩きつけられた灰色のスコアボード。

恐る恐るその硬い凶器を持ちあげると、案の定笑いながら眉間に皺を寄せているチームメイトが並んで立っていて、私は仕方なくもう一度スコアボードを動かして舐めるような視線の雨から逃げた。

冷たい手のひらにラケットを取り上げられた。グラウンドで走ってきたよ、色んな意味で嬉しそうな面々の後ろから発せられた言葉は相変わらず厳しく、私と彩乃は崩れたような笑い顔を浮かべた。

「グラウンドで、とか完全な嫌がらせだし！ 篠原のくせに」

「八つ当たりするなって感じだよね……彩乃、速い」

「遅いし！」「最低」「最低で結構」

垂れ沈む空一面の灰色を睨んだまま瞳を静止させた彩乃は、一層頬を膨らませてから速度を上げた。広いグラウンドは空の色に少しだけ霞んでいる。

多分篠原は知っていた。野球部と廃部寸前のサッカー部、同じく数に難のある陸上部が使用するグラウンドを少人数で、しかもいつもは校舎周りを巡るテニス部員が走るのは相当勇気がある。彼らの掛け声と興味津々な視線に塗れてひたすら走りながら、私は自分がひどく浅くぬるい海に漂っているような気がしてきた。上にも下にも灰色の広がる、まるで水族館の水槽内の世界のような。

「静葉、大丈夫？」「あ、うん別に……大丈夫」「そうじゃなくて！」

憤慨した表情の彩乃は、それでもさっきよりいつもの飄々とした雰囲気混じっている。

「さっきインターバルしようって言ったじゃん」

「はあ？ 二人で？ はい無理ごめん諦めて」応えている途中に彩乃の頬が再び膨らみ始めたから、私は早口で言い終えた。

その時ちょうど野球部のブルペンが見える位置に来て、どちらかと言うと美人な顔つきの部員が投球練習していた。そのひとがはつとしたように手を止め、黙ってこっちを見たから、知ってる？ というように彩乃へ視線をやると、「どうでもいい！」という元気な

返事を残して私を置いたまま行ってしまった。再び彩乃が一周重ねてやってくるまで一人になった私は、傍らでタイム測定を行っていた陸上部の長距離の人たちに負けたくなくて、それなりに身を入れることにした。それが少しだけオーバークワークになってしまったのは否めない、けれど。

——そして多分、この状態はその結果だと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597i/>

アグレッシブ

2010年10月13日17時34分発行